第42回京都府文化賞受賞者紹介

	氏　　名		受賞者紹介
特別功労賞	小名木（おなぎ）　陽一（よういち）	染織家	鮮烈な色彩で織物の可能性を最大限に活かし、平面から立体まで幅広く作品づくりを行う。特に従来の美術織物とは一線を画す大胆で巨大な立体作品は、伝統に縛られない自由な作風として海外でも高く評価されている。
	柏原（かしわら）　正樹（まさき）	数学者	代数解析学の構築に決定的な役割を果たした「D加群理論」を確立し、数学界最大の懸案の一つである「リーマン―ヒルベルト問題」を高次元化することに成功。これらの功績により、数学界最高峰とされる「チャーン賞」を日本人で初めて受賞するなど、国際的にも高く評価されている。
	十六代 佐野（さの）　藤右衛門（とうえもん）	造園家・桜守	桂離宮や修学院離宮、京都迎賓館といった国内の名園にとどまらず、パリ・ユネスコ本部日本庭園をはじめ国外でも数々の庭園を作り上げ、高く評価されている。また、「桜守」として、桜の調査や研究を重ね、全国各地の名桜を守り継ぐなど、幅広く活躍。
	田端（たばた）　泰子（やすこ）	歴史学者	歴史の舞台に赴き、そこに暮らす女性の声に耳を傾けることを重視。話し手の言葉を記録する「聞き書き」という手法でしか残せない史実を丹念に拾い上げることで、各社会で女性が果たしてきた役割をあぶり出してみせた。京都橘大学の学長を務めるなど、後進の育成にも尽力。
	三代 宮永（みやなが）　東山（とうざん）	やきもの作家	土が持つ可能性と深く向き合い、土が持つ様々な表情を作品として見せるための素材研究を続け、ジャンルの枠にとらわれないその作品は、国内外で高く評価されている。
功労賞	今村（いまむら）　源（はじめ）	現代美術家	ボール紙、発泡スチロール、針金等、誰しもの生活にありふれた素材を用いて作品を制作。ユーモラスでありながらも、作者の哲学的思想を垣間見ることができる作品は高く評価されている。
	小泉（こいずみ）　和裕（かずひろ）	指揮者	京都市立堀川高校音楽科（現・京都堀川音楽高校）出身。24歳の若さでカラヤン国際指揮者コンクールで第1位に輝き、巨匠カラヤンの薫陶のもとマエストロとして成長を遂げる。その後、国内外の錚々たる楽団を指揮するなど、音楽の神髄を追及し続けている。
	千（せん）　宗左（そうさ）	表千家15代家元	千利休以降、約400年にわたり脈々と受け継がれてきた茶の湯を継承。平成10年に「不審菴文庫」を設立し、表千家家元に伝わる古文書等の研究に取り組んでいる。幅広い層の人たちに茶の湯の精神を理解してもらうため、茶道の普及・発展に尽力。
	豊嶋（とよしま）　泰嗣（やすし）	ヴァイオリン・ヴィオラ奏者	大学卒業と同時に新日本フィルハーモニー交響楽団のコンサートマスターに抜擢され、その後も国内外で幅広く活躍。京都アルティ弦楽四重奏団の活動をはじめ、近年は関西に拠点を移し、京都市立芸術大学で教鞭を執るなど、後進の育成にも尽力。
	味方（みかた）　玄（しずか）	能役者	技芸の洗練をもって伝統継承に努め、豊かな感性と的確で端正な演技は高く評価されている。一方、能楽が培ってきた魅力を多くの人に届けようと、テーマや舞台構成に工夫を凝らした意欲的な自主公演を行うなど、能楽普及や後進の育成にも尽力。
	宮永（みやなが）　愛子（あいこ）	美術家	常温で昇華するナフタリンなどを素材にした作品により、変わりながらも存在し続ける世界を表現。作品を通して様々な視点や考え方があることを訴えかける作品は高く評価されている。
	森田（もりた）　保美（やすよし）	能楽笛方森田流	京都を中心に全国各地での公演に出演するほか、囃子方でユニットを結成し、能楽の普及と次世代育成のための自主公演等を積極的に開催。表現力と艶のある音色により、能舞台を支える氏の活躍は高く評価されている。
	山部（やまべ）　泰司（やすし）	洋画家	常に内から溢れ出るものをその時に描き、和洋や時代を問わないボーダレスな作風が特徴。近作では、ルネサンス期のデッサンと北宋の山水画に着想を得つつ、自身の持ち味である線的な描写を駆使した風景画を制作し、さらに評価を高めている。
奨励賞	石塚（いしづか）　源太（げんた）	美術家（漆）	身の回りモノや日常の出来事を作品に昇華させ、リアリティを与えることで、自身と漆の距離を近づけるなど、漆を使った新たな表現の可能性を世界に発信する姿は、国内外から高く評価されている。
	黒宮（くろみや）　菜菜（なな）	洋画家	主に人物像をモチーフとして、流動性の高い画材によって作られる油彩作品と、重ねた和紙に染料を滲ませて描く紙作品、いずれも独自に研究を重ねた2タイプの技法を使い分けて作品を制作し、その独創的な技法と幻想的な作風で注目を集めている。
	最果（さいはて）　タヒ	詩人	どう読まれるかを想定せず、思いつくままに紡がれた言葉で、多くの読者を魅了。詩作のみならず、小説やエッセイの執筆、美術館でのインスタレーションなど、多岐にわたる表現活動でも注目されている。
	清水（しみず）　徹太郎（てつたろう）	声楽家	京都市立芸術大学・大学院において声楽の技術面と精神性を学び、大学院を修了する年にプロデビュー。びわ湖ホール声楽アンサンブルなどを拠点としつつ、国内外で精力的に活動し、人の心を動かすその歌声は高く評価されている。
	10（てん）-FEET（ふぃーと）	ロックバンド	ロックやパンクをはじめ多様なジャンルを取り込んだ音楽性と、迫力あふれるライブパフォーマンスで数多くのファンを魅了。また、宇治市内において野外音楽フェスを毎年主催するとともに、京都府文化観光大使を務めるなど、地域活性化にも貢献。
	林（はやし）　宗一郎（そういちろう）	能楽師	林喜右衛門家の十四世当主。自主公演企画に加え、海外公演や多様なジャンルとのコラボレーションなど、幅広く活動。能楽の新たな可能性を探るため、“外”の視点を取り入れつつ、古典への理解を深め、時代にあった価値観を見い出そうとする存在として期待が寄せられている。